

父は生涯において幾度か生死にかかわる経験をしている。

一つは六十一歳の時に患った心筋梗塞である。何とか一部の梗塞で済み一命を取り留めそれから医者の注意もよく聞き十分注意をし、後十八年を生きる事が出来たが七十九歳で鬼籍に入る事となった。松本高校時代にも徒競争などでドクターストップをかけられたりしているくらい、もともと心臓は悪かったらしい。昭和二十年就職をして出ていった東京で仕事のストレスか、重い心臓病を思いそれが基で郷里の諏訪へ帰る事となりその後の人生が変わっていく事になるのだ。ヘビースモーカーであったことも、拍車をかけたのだつたろう。

二つ目は、昭和二十年の五月二十五日に東京渋谷で受けたアメリカ軍の空爆。丁度就職をしていて千葉に居た時期であるが、親戚の民平叔父の家に居たのだらう。東京大空襲といわれる三月十日に匹敵するもので、皇居も被爆している。その時の手記が残っている。その悲惨さと緊迫した当時の様子が生々しく書かれている。どうしたらいいかとも考えていたが、PDFファイルにして見ていただければと思いついてみたが、あまりにも文字が小さくこのままでは読みづらいということもあり、なるべく原文に忠実に書き直すことにした。

三つ目は、八王子の湯の花トンネルで起きた湯の花トンネル列車銃撃事件（委の花トンネル列車銃撃事件）。これは第二次世界大戦末期の昭和二十年（千九百四十五年）八月五日正午過ぎに東京都南多摩郡浅川町（現、八王子市裏高尾町）内の国鉄中央本線湯の花トンネルで、アメリカ軍のP-51戦闘機複数機が満員状態の列車に対して機銃掃射を加えて多数の死傷者が発生した事件である。この銃撃を受けた列車に父が乗っていたのである。

これは自身の作った私製本にその当時の様子が克明に記されている。五月に空襲を受け生き延び、叔父の代わりに郷里に疎開している親戚に、荷物をもっていく事となったその列車で又銃撃を受け生き延びるのである。運は強かったのではないだろうか。その顛末はこの被爆記の後に、紙面を借りて掲載したいと考えている。

被爆記

昭和二十年五月二十五日、此の日を私は一生忘れ得ないであろう。此の日こそ私に與へられた最初の試練の日であらう。あつ狂的な猛爆の中で生死の境を経た私は、今生きてゐるといふ偉大な事実に玉しう呆然として信じ難い。私は三小からあつ恐怖の一瞬と出来ぬ限り正確に記し、これと思ふ。

その日は夕暮から吹き始め、風が、日中の暑さを追いつめて静かな初夏の匂いが満ちる。風呂から上ると、私は湯桶と共に入浴剤とタオルを持って、名田集と片端からかけて行つた。キューベルト、カノイ、モツアルト、そしてベーターマンの月光の曲。その美しい、静かなメロディ

【被爆記】はこんな書き出しから始まる。

昭和二〇年五月二十五日、此の日を私は一生忘れ得ないであらう。此の日こそ私に與へられた最初の試験の日であった。あの狂的な猛爆の中で、生死の境を経た私は、今生きてゐるといふ偉大な事実をむしろ呆然として信じ難いのだ。私はこれからあの恐怖の一瞬を出来るだけ正確に記したいと思ふ。

その夜は夕暮から吹き始めた東風が、日中の暑さを追い払って静かな初夏の匂ひが満ちて居た。風呂から上がると私は益穂君と共にポーターブルを持ち出して、名曲集を片端からかけて行つた。シューベルト・バッハ？・モツツアルトそしてベートーベンの月光の曲・・・その美しい静かなメロディーの内に、この宿命的な夜はをだやかに更けて行つた。私達は幸福な喜びのうちに早めに寝についた。電気スタンドを引寄せて小説を讀み始めて未だに二枚目もめぐり終へない頃であつた。不気味なサイレンの音が街の静寂を破つた。とびおきて服装を整へた私達は「数目標北上中」といふ情報に、さてはすごいのが来るなど瞬間的に直覺し身のひきしまるのを覚えた。

實際東京は既に半端以上を焼かれ、殊に前々夜はすぐ前の処まで焼失して居るのだ。今夜くれば此処がやられるに違いないといふ恐ろしい考へが誰の頭にもあつた。敵機の侵入迄には未だ間があつた。水槽は満々と水を湛へ、あらゆる要品が揃へられると、もう敵機の来襲を待つ許りであつた。空は一面に薄雲がかかり、やや楕円形の月が黄色い輝きを中天に放つて居た。探照燈の光がぐるぐると夜空に廻り、戦闘機の爆音がぐわうぐわうと響き始めると、房総方面から侵入した敵の先頭機が先づ視界に入った。『来たな』さつと皆が緊張した。その頃急に南方の空がパツと赤みを帯び、既に遠くに火災が起こりつつあつた。敵機はこよりやや南にすすみ、更に右に進路を転じ、北進し、更に右に転じて再び東方に向ふ。一機・一機、約三千から四千の高度をとつて侵入する。代々木の高射砲がボタンボタンとトタン板をたたくような音をたてて、敵機の周囲に炸裂し始めた。やがて東方の都心部の方角にあたつて猛烈な火災が起こつた。敵の攻撃は専らそこに集中されてゐるらしい。投下する焼夷弾がパツと花火のやうに開いて、バラバラと落ちるのがみえる。しかし一時は遠いかと思はれた敵機も次第に進路を西にふり我々に近づいていた。敵機は進みながら、時々機銃弾を下に向けて放ち、その赤い尾が目染みるやうに美しい。頭上にはもう火災による煙がおほひ、その中につっこむ敵機の姿は探照燈を放れて黒く見えた。高射砲がガンガン鳴る。突然、代々木の方角にあたつて空中にぐつと赤い線がひかれた。命中だ命中だ。私は思はず「ザアマミロ」と怒声をあげた。しかし燃えている敵機は尚も機銃弾をまき、最後の足掻きを続けて居た。けれども命中するのは殆どなかつたと言つて良い。敵機は悠々と行動を続け、焼夷弾を蒔いては空中に光の花を開かせる。敵機が頭上に近づく度に、私達は壕にとびこんだが未だ私達に危険はなかつた。敵機の進路はわずかに東によって居た。何であらうか時々青白い閃光がひらめいて、黒い静寂に沈んだ街の家々や木々をくつきりと浮かび上がらせる。三・四十機も来たであらうか、一時敵襲に間隙があつた。都心部の方角は炎々と燃えさかり、風で流れる煙はいよいよ厚く頭上をおほひ始めたが、私達は一時ほつとしたものを感じた。その時、私達を安心させるには敵機の攻撃が別の処に集中されているといふ事だけで充分すぎるほどであつた。しかし私達を支配した共通の感情は、実に果敢ない一瞬の幻影であつたといへる。なぜなら、私達の上に伸べられた魔の手は次第に背後からしのびよりのつあつたからだ。魔手——そうだ、私達の生死をかけたあの数時間を的確に表すべき言葉を私は持たない。

時間はわからない。多分十一時頃であつたらう。西の方にあたつて次第に探照燈の光芝が交錯し始めた。明らかに伊豆半島の方角から侵入した敵機群であらう。西方から都心部の火災を目指して来る敵機は必然的に私たちの頭上を通過するのだ。今度こそ来るぞと全身がじいと鳴るやうだった。たちまち世田谷の方角に火の手が上がつた。それがぐんぐんと両側に伸びてゆく。敵機は更に進んで私達の頭上に来る。此の頃北の方にあたつて、火の手が上がつた。私達は完全に四圍を日で囲まれたのだと確認した。刹那私はふと慄然たるものを感じずには居れなかつた。敵の今までの手口はどうだつたらう。先ず周囲に落とし、そして中を縦横にやるといふことは、今迄の例で歴然とした。『いよいよ来るんだ』私は恐怖と闘魂の交錯の中に興奮していた。果たして頭上に侵入した敵機は殆ど私達の真上で投弾を始めた。あの憎らしい怪物が低迷する煙の中を泳いでぐんぐんと進む。渋谷駅の辺りに落ちているのだらう。もう焼夷弾のザーツザーツといふすすまじ

い落下音が私達の耳朵をうちはじめた。壕に入り壕より出で、敵機の進路をはっきり見きはめやうと私達は必死になつていた。着弾は次第に近づいてきた。上馬の方角にもバラバラと弾が雨のようにふりそそぎ、紅蓮の炎がグワツとわき上がる。グングンと腹にひびくようなあの怪音が急に近づいた。ザーツと特有な音がひびいた。壕にとびこんでふたを閉めた途端にターン、ターンといふ音と共に壕が少し揺れた。「来たぞっ！」壕から飛び出すと門の外は殆ど火の海である。油脂が到るところに散乱して、無数の炎が青く燃え上がつてゐた。「畜生！」とさげふと私は水槽に突つ込んであつた筈をひき出してとび出、夢中になつて地べたを叩きまわつた。火は面白いやうにきえた。しかし火のまわりも早い、垣根の裾がもえ出したので叩かうとすると、たれかが横合いから飛び出した。前のトラックのタイヤ・その傍らに積まれた汲み取り用の桶も火を發した。一面火だ。私達はその中を乱舞した。その時だった裏から飛び出してきたM叔父さんが「裏の平さんがやけているから皆来てください」と叫んだ。もう道路の火は問題外だ。ざつとバケツに水を汲むと私は真つ先に裏へ走つた。成程塀一つへだてた平さんの家がほぼ中心部から火を發していた。「これはいかん」と直覚すると私は石垣を飛び下りてTさんの家のあいた縁側からとびこんだ。中は一面火であつた。火は畳にひろがり、襖にはひ上がつてゐた。その中に私は一人だった。私はバケツをふつた。しかし水は出なかつた。途中でこぼれてしまつたのだらう。もうもうと煙がまき始めた。私は初めてとび込んだ家でちよつと方向がわからなくなつてまごついたが、すぐにとび出した。又家の裏にかへる。をじさん達が盛んに塀に水をかけてゐた。私も水をくみに走ろうとしたとたん、又あのザーツという音が襲つて来た。その瞬間誰もが一樣に恐怖を感じたに違いない。私達はかたまつて軒下にしゃがみこんでしまつた。ただそれだけの動作は何の効果もないに違いない。しかし私達はそんな事までしなければならぬほど、動揺して居たといへる。ドーンドーンと又それは平さんへおちた。正に天祐だ。一間とへだたりはないのだ。まだこの家は一発も弾をうけて居ない。平さんの家はぐわうぐわうともえさかつた。もうそれを消すことは全然意味がないと考えた私達は、こちらへもえうつらぬ手段を尽くさなければならなかつた。益穂君が屋根に上つた。私達は風呂の湯をくんで上へあげた。あたたかい湯が頭からかかつた。頭の上ではたえずバーンバーンと焼夷弾が開き、雨のやうに降りそそぐ。風向きが変わつてきた。西南の風が次第につつて来た。それと共に煙がまいて来た。眼があげられぬ程いたい。その上、常にザーツザーツとくる。私達はしばしば壕に入り壕から出ては、又消火につとめた。裏は充分に水をかけた。表へまはると前の汲取り会社はまだ大丈夫だが、その隣のアパートが火を發し始めた。左手の交差点の向ふは火の海である。炎が赤く地を匍ふ。ますます風はつり、世田谷方面の火の子と煙をふきつけてくる。すごい熱風だ。眼がいたい。ぼんやりしてをれば、我々は完全に火にとりかこまれさうだつた。それに上には絶えず焼夷弾の恐怖があつた。「一時ひきあげやう」叔父さんがかう言ふ。誰にも異存はなかつた。手送りで壕に入れるべきものが入れられた。ふたには土がもられた。たださうした混乱の中に我々は何かわけのわからぬことを叫んで居た。S叔父さんが自転車をひき出して来た。その他私達は何も持とうとは思つて居なかつた。少しでも火勢がおとろえたら、もどらなくてはならないと思つたからだ。私は水を入れたバケツを手持した。隣の石井さんのをばさんが少し許りの荷物をもつて来る。風速は何十米であらうか。颱風にも似た強烈な熱風の中を私達は一高の広場へ向かつた。もう必ず焼けるといふ気持ちもいだくかと思ふと、もしやこの風なら案外残るかなとも思ひ乍ら。しかし私達の行く手には未だ苦難があつた。眼の前には世田谷一帯が真紅にもえさかり、ザーツザーツと焼夷弾が落ちる。しかし幸運にも私達のまわりには何もおちない。広場の麦畑はどこどころ弾がおちたらしくもえてゐた。煙がぐわうぐわうと渦を巻く。私達はこの広場の中央に掘られた大きな壕に入った。この中に入れば煙と火の子から助かると思つた。先程までぐつしよりぬれていた服も、もうからからにかわいて、手はすりあわせるとかサカサと音がしそつた。のどがひつつくやうにかわいた。目がキリキリいたむ。私はさう思つて半分もなくつたバケツの水に手拭をひたし、目を洗つた。しばらく眼をつぶつて居やう。私はさう思つて座り込んだが、なにかしゃべらないうちにはいられない焦燥にかられてIさんのをばちゃんをつかまへると、いろいろのことをとりとめなくしゃべりまくつた。さうした中にも、たえず早く行つて消したいという希望を失いはしなかつた。外の風はますますつてきた。又 ザーツといふ音がした。皆が本能的にとつと穴へとび

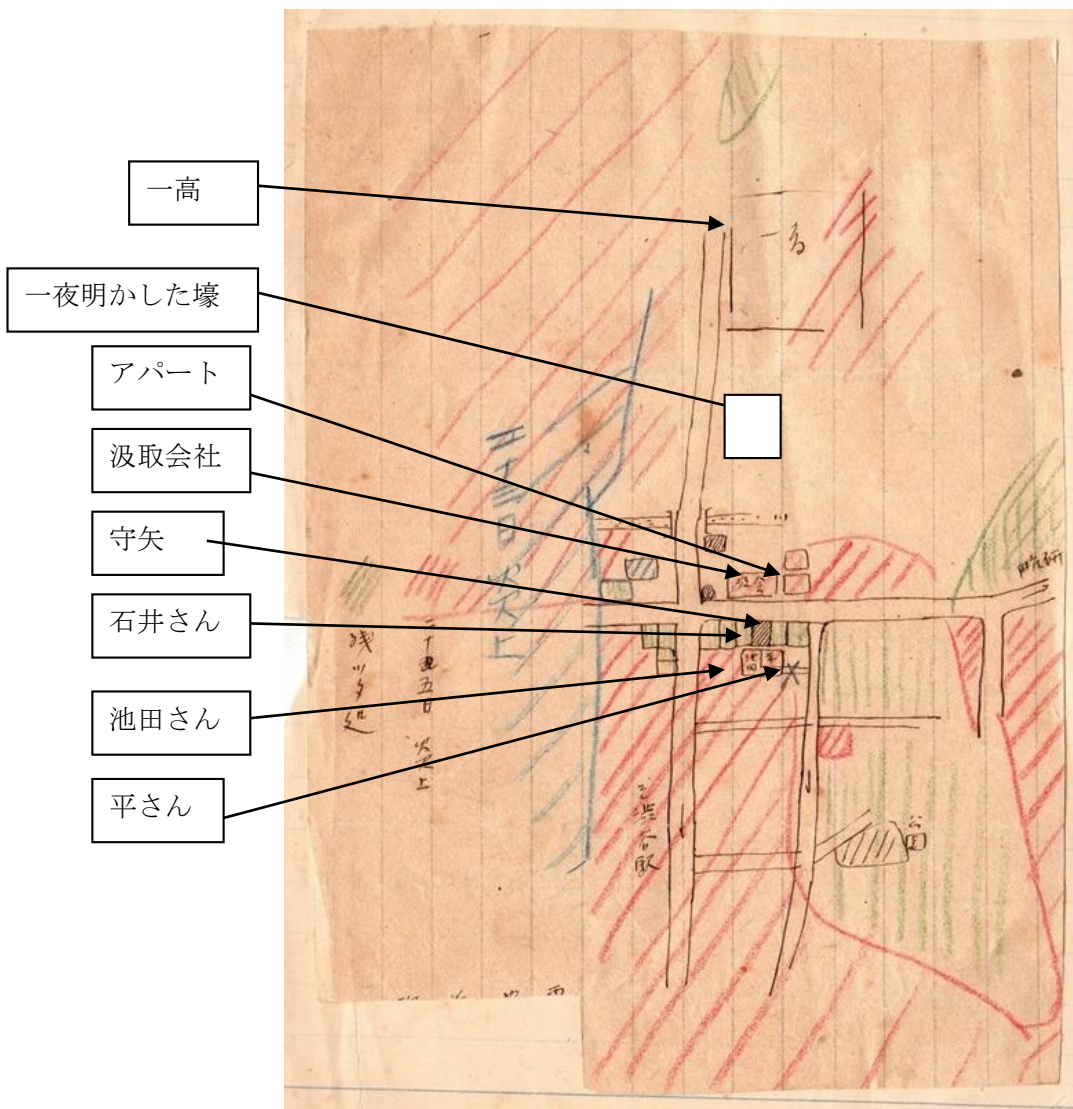
こんで来た。入り口においた私のバケツはけとばされて、乏しい水が地べたにころがってしまった。私は悲鳴をあげたにちがいない。それ程水は大切に思はれたのだ。外へ出ると世田谷の火事はますます大きくなり、火の子が雨のやうに降りそそいだ。目もあけられぬ程ひどい熱風だ。皆壕のふたをしめて中にしゃがみこんだが、熱風は煙を伴って戸のすきまから吹き込んで来た。苦しい。私は手拭を顔にまいて目をつむった。しかし頭だけはいやに働いた。「蓄音器が焼けちやふなあ」といふと横にいた益穂君が「うん。今夜が聞きおさめだったね」と笑ふ。ふと米が惜しいなあと思った。どんなつまらんことのやうでも、かうした場合には重大に思へるのだ。叔父ちゃんが「壕さへ助かってくれたらなあ」といふと、益穂君が思ひ出したやうに「あつラヂオの被覆線が危ないなあ。あれはよくもえるんだから、切ってくればよかった」さういふと、私は壕もえてゐる有様が見えるやうに思はれてぐっとつばをのみこんだ。風は更につのつた。敵機は未だをる。外に出るとたんに一高の裏がぐわつと明るくなって時計台がくっきり見えた。広場の道路の傍らにつまれた木材がいつしか燃え始めた。正に焦熱地獄である。体中がますます乾いて来た。又穴には居ると私は腰を下りて呆然として考へていた。叔父さんが「寝ちやあいかんよ」と

言ふのになづき乍ら、私は手拭を鼻にあてた。『そうださつき道で「火傷の薬はありませんか」といった男があつたつけ、あの男は頭から体中油脂がはねて居たな。可愛そうに。』そんな事を考へながらも、私は未だ充分に安全だとは思つてゐなかつた。壕内には煙がいくらでもはいつてくる。いつしか腸がいたくなつた。のどがかわく。呼吸が少なからず苦しい。しかし外は更にひどいのだ。さうした苦痛の時間が何程かすぎて行つた。何時頃か、少し煙が弱まつて来た。火の子と煙も少しはましな状態になつて来た。家の方を見ると前の汲取り会社が盛んにもえて居るらしい。その他はわからない。「さあ行かう」さういふ叔父さんの声と共に皆勇躍してとび出した。赤土の坂を一気にかけて上ると、お家は未だ無事だ。「ワーツ」と無茶苦茶な声をあげると私は門へ飛びこんだ。裏の平さんの家はやけおち、うちの物置も半分はやけて居た。しかし炎は上がつてゐなかつた。私達はこの嚴然たる事実を、むしろとても信じられないことのやうに思えてならなかつた。《後でできた炭の山が未だ燃えてゐた。水槽の水はもう一滴もない。すぐ隣の井戸から水を汲むと消火作業を始めた。私達の苦難の時はもう過ぎさつてゐた。もうなにも危険はなかつた。私達は生きてゐる。そして家も完全に助かつた。余りにも幸運すぎる。だから私達にはとても信じられなかつたのだ。》助かつたんだぞ。　「さう自分に言い聞かせながらも、私は『本当か』という反問を殺すことは出来なかつた。私は益穂君と表に出た。道傍にすわり込んだ私達はもう何も言へない程つかれてゐた。ただ「よかつた。」「とつぶやきながら、前のアパートのやけおちるのを何の感動もなく、そして何の気力もなく唯茫然とながめて居た。頭がジンと鳴っていた。叔父さんがパンを持って来て下さつた。パサパサの口には何の味もなかつたが、私はただモクモクと機械的に口を動かして居た。汲取り会社の自動車が未だもえ、木炭の山が青い炎を上げた。やがて朝がおとづれて来た。しだいにあたりが白んで来たので、私は益穂君と共に常吉さんの前の小路を下つて様子を見に行くつと、この大路に面した一列を残して家の裏から澁谷駅の方にかけて全部が燃えてゐるらしい。松濤公園のあたりから下は火のために全々通れない。火と煙の渦が濠々とたちこめて居た。残つたのはこの一角の数軒から松濤の鍋島公邸の周辺にすぎない。平さんの焼跡をながめてゐると、グランドピアノの残骸が素つ転がつてゐたが、それを見るとをしいなあと思ふほど、もう心にゆとりが出来てきてゐた。家を見まわるとショックでこわれたらしく六畳と四畳半のガラス戸が数枚ふつとんでゐた。家の中は一面に埃がつもり足の踏み場もない。しかしそんな事は問題ではなかつた。泥だらけで上がり込んだが、私達はもう何も言へない程疲れてゐた。叔父さんがコップに冷酒をついで下さつたのを呑むと、私達はゴロゴロと寝ころがってしまった。疲れた体がバラ　　になりさうに思はれる。ツキン　　といたむ頭をかかへて私はねむれなかつたが、しばらくして石井さんのをばちゃんが朝食を持って来て下さつた。私達はむさぼるやうに食べた。あつい味噌汁の香がツーンと鼻にしみると、私は幸福さでこみあげてくるのを感じた。表でも裏でも未だ炎が上がつていたが、私達はもう倒れさうな程つかれて居た。フトンを引出すと私は何も考へずぐつすり寝た。

十時頃おきると叔父さんはもう庭を片付けて居られた。矢澤さんがたづねて来られたと言ふが、私の眠りはそれに気づくほど浅くはなかった。体は疲れ果ててゐたが、私達は再び行動を開始しなくてはならなかった。一難は去ったが、私達は次の空襲にそなへなければならぬのだ。問題は物置と塀の再建である。焼け跡から敷石が、トタンが拾いあげられ、夕刻まで作業が続いたが見事にこれも完成した。残されたのは水槽に水をはることであった。水道は勿論出ない。私達はリヤカーを引いて前の川まで数回足を運んだ。準備はなつた。私達は再び活動に備える気持をもつた。

夕方ふと座敷に入ると、床の間の観音様にお燈明がゆらいでゐた。叔父さんがそなへられたのだらうが、私はそれを見るとただ有難いといふ気持になってひざまづくと手を合わせた。眼がしらがジーンとあつくつた。私達の胸に又平和がよみがへつて来たのだ。

以上



父がその時描いている周りの状況図になる。
ブルーの斜線が23日に炎上・赤が25日に炎上。
かろうじて残った処が緑で色分けされている。

※これを見る限り、よくも家が焼けずに残ったものだという気持ちになる。本当に航研に向かう道路と澁谷駅に向かう道路の十字路でも、澁谷駅側の一列が残っただけというのが奇跡としか思えない。父も九死に一生の思いであつたらう。